

02・このまま、

とある年の夏。八月十八日、水曜日、十八時ごろ。

日本のとある、かなり寒い地域の政令指定都市。

天気は晴れ。気温は二十五度程度。

場所は、市内のとある高級住宅地。

その外れにある『鹿島 智絵里（かしま ちえり）』の自宅・自室だ。

この時間帯、智絵里の部屋は、外よりも暑くなる。

西日によって部屋全体がオレンジ色に染まり、それは美しい光景になるものの、気温も上がるからだ。

だから主人公と智絵里はしっかりと冷房を入れて、抱き合ったまま、ベッドと一緒に寝転がっていた。

そんな二人は、あの後家の中に入ってシャワーを浴び、その最中にもセックスした。例のごとく智絵里が誘惑してくれば、主人公はなすすべもない。

花に吸い寄せられる虫のごとく選択肢を失って、智絵里の底なしの欲望にのまれるだけだ。

それは智絵里の部屋に戻ってから続き、智絵里のベッドでも、主人公は智絵里を犯した。

ほとんど毎日のように会っていて、会えば必ずと言っていいほど交わるのに、自分達はまるで飽きない。

それどころか、ますますのめり込んでいく。

だから、いつか、どうにかなってしまいそうで怖い。

だがそれでも、やがて限界は訪れる。

もはや今日何回目もわからないセックスが終わる頃には、智絵里は力尽きて眠ってしまい、主人公もそれにならって添い寝しているうち、この時刻になった。

ところで智絵里は、この部屋に入った瞬間からずっと主人公に密着したままで、今もまるで離れる気がないようだ。

ベッドに座ればわざとらしく手を内腿の間に導いて誘ってきたし、行為が始まれば両手両足をしっかり絡めて、決して逃がすまいと必死でしがみついていた。

先ほど目を覚ましてからも、ずっとそんな感じだ。

横になったらなつたで、今度は主人公の胸に頭を押し付けてくるし、時折、すんすん、

と主人公の匂いをかいだり、主人公の胸に耳を押し付けて心臓の音を聞いたりしては、満足げにくすくすと笑っている。

このように、セックスした後の智絵里は、憑き物が落ちたかのように、とにかく素直でおとなしい。

そんな智絵里にたっぷりと甘えられて、主人公は身も心もとろけそうだった。この時がいつまでも続けばいい。本気でそう思った。

だけど、そうはいかない。

もう少ししたら、夕食の時刻だ。

そうなたら二人は主人公の家に移動して、主人公の母親とともに食事をするのがお決まりの流れだ。

その後、智絵里の両親のどちらかが迎えにくるまでは、二人は一緒に過ごせるだろう。でも、眠る時は別々だ。

たとえ主人公がこのまま毎晩、毎朝智絵里のそばにいたいと思っても、それはできない。

自分達は、誰にも恋人同士だと認識されていないのだから。

そんな事を考えていると、ふと智絵里と目が合った。

すると智絵里はそれが当たり前のように目を閉じて顔を寄せ、キスをせがむ。
応えているうちに、別れの時刻が近づいてくる。

SE1 外の環境音

【最初から最後まで流す】

【繰り返して流す】

【0―5秒ほど流してセリフ】

【その後、ごく小さな音でトラック終了まで流し続ける】

【部屋の外の音を、部屋の中から聞いている】

「※4回※ キスする。

唇を重ねるだけだが、露骨な音を立ててする、甘々なキス】

ん……ちゅっ。

ちゅっ……。ちゅ♡」

智絵里、唇を離すと、主人公を嬉しそうに見つめながら尋ねる。

「くすくすと嬉しそうに尋ねる。

だが『自分はもちろん把握しているが、主人公はきつと覚えていないだろう』と思っている」

ねえ。今日自分が何回イツたか覚えてる？」

〈主人公〉

「えっ？ うーん……。ちよつと自信ない……」

主人公、それなりに努力はするものの、結局回答できずに負けを認める。

智絵里は頻繁にこれを聞きたがるのだが、主人公は答えられたためしがない。今日こそは覚えていようとしても、結局忘れてしまうのである。

行為中は極端に思考能力が下がるというか、複雑な事を覚えていられなくなるような気がする。

特に、三より多い数を数える事は難しい。

したがって、いつもあいまいな記憶しかないのだった。

「くすくすと嬉しそうに尋ねる。

『きつとこちらなら、確実に答えられるだろう』と思っている」
じゃあ、私がイツた回数は？」

〈主人公〉

「六回？」

それでも、こちらには自信がある。

主人公がもっとも気を付けている分野だからだ。

自信がありすぎるというのも気恥ずかしいが、事実あるのだから、仕方なかった。

「【露骨に声が弾む。ものすごく嬉しい。ものすごく機嫌が良くなる。予想が的中したので】

うわ。そっちは覚えてるんだ。怖（こわ）♥」

〈主人公〉

「だって、ちいの事だし……」

もごもごと歯切れの悪い返事さえ、今の智絵里には快いようだ。満足げに目を細めると、きやつきやと笑い始める。

「すごく幸せな気分。」

主人公に愛されている実感がわいたので。

『やり倒す』とは『昼から夕方の間、ずっとセックスしていた』という意味』
ふふふふ。今日もやり倒しちゃったね。

【嬉しそうに。愉快で仕方がない。

真面目に勉強していたと思っっているだろう両親や周囲の人の事を思うと、笑ってしまう』
全然勉強してない。ふふふふ♥」

〈主人公〉

「もう……」

主人公、『そんな事得意げに言うものじゃない』とたしなめなくなるが、『どの口が言うのか』という話である。

よって、苦笑するほかない。

「【前々から思っていた事を切り出す。

しかし本人としては『ふと思いついた風に』話している。

『これだけセックスしていたら、そのうち、何かの拍子で二人の身体が一つに融合して

しまう事はないだろうか。そうになったら、とても素敵なのに』と言いたい」
ねえ。こんだけしてたらさあ。

そのうちくつついて一つにならないかなあ」

〈主人公〉

「え？」

するとここで、智絵里が不思議な事を言い出した。

主人公はその意図が理解できないながらも、ひとまず続きを促してみる。

「ぽつぽつと、ゆっくりと語る。

とある作品について話している。

それは、仲の良すぎる二人が、ある日抱き合った瞬間、一つに融合してしまうというものだった。

その融合は、作中では『トラブル』として描かれた。

二人は元の姿に戻りたいと願い、最終的にそれが叶った事で物語が終了した、
だけど智絵里はその作品を読んだ時『こんな風に主人公と一つになれたら、どんなに素敵だろう』という感想を抱いたのである」

そういうお話、あったじゃん。

仲良すぎて、一つになっちゃうってお話。

私あれに憧れてたの。

【**少しだけ声のトーンが下がる。少し切なげに**】

そしたらもう、淋しくないのに。ずっと一緒にいられるのになって……」

〈主人公〉

「ちい……」

智絵里が何を言いたいのかは、もう、痛いほどわかった。

だからたまらなくなつて、主人公はそつと顔を寄せる。

それを待っていたかのように、智絵里が目を閉じる。

「**※1回※** キスされる。

不意打ちの、あまり音がしないキス」

ん♡

〈主人公〉

「大丈夫だよ。居るよ。何があっても居る。
わたしはずっと、智絵里のそばにいるからね」

主人公、智絵里の言葉に、真剣に応える。

心からの想いを告げたところで、自分が頼りない事はわかっている。

主人公はまだただの学生で、家族の助けなしでは、将来を決める事すらできないほど弱いだからだ。

それでも、選びたい道は一つだ。

たとえ自分がどれだけ無力でも、逆にある日突然、万能な存在になれたとしても。

自分は必ず智絵里の事が好きだし、どれだけ他の優れたものをちらつかされても、智絵里以外を選ぶ事はない。

それだけは伝えたかった。

「くすくすと嬉しそうに。

『主人公なら、必ずそう言ってくれるだろう』と思っていたので。

しかし、今はそう本気で思ってくれていても、将来どうなるかはわからない。
なので、声は笑っているものの、しつこくたずねる」

※あまり早口にならないようにお願いします

何？ 居てくれんの？

ずっと？ ほんとにずっと一緒？

ほんとにー？」

〈主人公〉

「本当だよ。信じてくれる？」

「【ものすごく嬉しそうに。

『え♡ もちろん信じるよ♡』と言っているのと同じ声で言う」

え♡♡ 信じてない♡♡

『『ロリコンであるかどうか』と『人として信用できるか否か』は、あまり関係がない。しかし、今は何でもいいので主人公に意地悪を言いたい』
ロリコンの言う事は信じてない♡♡」

〈主人公〉

「えー……？」

果たして智絵里は今、どの程度主人公を信じてくれているのだろう。

主人公さえ、主人公を信じきれない。そんな中、智絵里はどう思っているのだろう。素直なのか、あまのじやくなのかわからない智絵里の事だ。

『信じてない』という言葉が本心だとは限らない。

逆に、こうして笑いごとになっているのは、この先を悲観してのものなのかもしれない。た。

このように主人公が判断しかねていると、よほど心細そうな顔をしていたのだろう。智絵里が再び話し出す。

「何気なく話しているようだが、本気。

つまり『主人公に、自分が死んでしまうまでずっとそばにいてほしい』と言っている」証明したかったらさあ……ほんとにずっと居て。

私がおばあちゃんになって。

『もうすぐ死ぬ』って時にも居てくれたら。

その時に『ああ。本当だったんだなあ』って信じるから」

『ね?』と言うように、智絵里が見上げてくる。

言葉にするまでもない。

主人公は頷き、智絵里の手を握る。

たとえ未来が見えなくても、今の気持ちを伝える事だけはしたいと思った。

〈主人公〉

「……わかった。居るよ。智絵里が死んじやう瞬間まで、ちゃんとそばにいる」

SE2 智絵里がベッドの上で動く音

【最初から最後まで流す】

「真剣に、ゆっくりと。」

何度もしつこく念を押す。絶対にそうして欲しいので」

約束だよ？

約束。

絶対約束。ね？」

〈主人公〉

「……うん。約束」

夕日に染まった部屋で、主人公の影が動く。

実体よりもずっと大きく黒いそれは、どこか不格好で気味が悪い。

『これこそがお前の本性だ』と言われれば、自分は反論できないだろう。主人公はそう思った。

それでも智絵里が信じてくれるなら、このような自分も、いつか別の何かに生まれ変わるかもしれない。

そんな儚い望みだけが、今の主人公を支えている。

〈主人公〉

「……智絵里は可愛いね」

主人公、ぽつりとそうこぼすと、智絵里の額にキスをする。

そのまま唇に移行し、今日何度目かわからない口づけを交わす。

「※3回※ キスする。

唇を重ねるだけだが、露骨な音を立ててする、甘々なキス」

ん♡ ふ♡ んっ……♡

【嬉しくて笑う。

主人公がたくさんキスしてくれたので】

ふふふふ♥」

暗い影に覆われたまま、智絵里が笑う。

この場所、この時間こそが夢見た場所であるかのように、主人公を受け入れる。一緒に汚れてくれと泣いたくせに、今も憎らしいほど無垢で、ためらいもなく全てを捧げてくれる女の子。

もし叶うのなら、主人公はそんな智絵里と、このまま最後の日まで一緒にいたい。

最後までちゃんと約束を守って『この人は嘘をつかなかった』と、『本当に自分のそばにいた』と知ってほしい。

そうなるまでには、あと、どれだけの事を乗り越えればいいのだろう。

そうするうちに、いつか自分が許される日も来るのだろうか。

考えても答えは出ない。

だけど確実に時は過ぎて、二人は今日も誰にも言えない関係のまま、一日を終える。それだけがただ決まっている、真夏のある日の事だった。

「【少しだけ声のトーンが下がる。少し切なげに】

好きだよ。お姉ちゃん。

ずっと私のそばにいて。

どこにも行かないでね……。

【※1回※ キスする。

智絵里から顔を寄せてキスするイメージ】
ちゅっ」

ここでフェードアウトして終了。